

玉依姫の靈言（2016年5月15日靈示） 担当:石田昭 2016年10月15日

- 1 玉依姫は「葵祭」（上賀茂神社、下鴨神社、）の祭神。徳川家「葵の御紋」が入っている。
- 2 玉依姫には「二人いる」説。姉が豊玉姫、以前は咲也加さんが豊玉姫と言われていた。
- 3 豊玉姫の「水中出産」説、夫に出産を見られ、恥ずかしくて里に帰ってしまう。生まれたのが鶴菖草菖不合命、妹の玉依姫が育ての母となり、後に妻となる。当時近親結婚あり。
- 4 玉依姫の第四子が神武、東征途中で長髓彦に破れ、兄の五瀬命も亡くなり、伊勢方面から、上陸して勝利。「太陽信仰」の起源、以前から存在したが、「天照信仰」が確立した。それ以前は「天照信仰」と「月読信仰」あり、「月読神社」が破壊されのは、持統女帝の時。一神教形式
- 5 八咫烏に姿を変え神武を先導した人物の娘説あり、賀茂一族の伝説だが、描写しかねる。
- 6 以下靈言：二説あるが、最初の方が正しい。「依り」は、「豊玉を助ける」という意味。賀茂家とは血縁関係があったと思われる。東征で亡くなった兄弟と建御雷の娘との婚姻？
- 7 賀茂神社に八咫烏、玉依姫信仰が残るのは、奈良側ではなく九州神武側に協力した象徴。
- 8 玉依姫は日本神道の「巫女職の総本山的な位置づけ」にあたる。家康として転生には驚き。
- 9 豊玉姫（青木職員）は竜宮界に縁あり、玉依姫は日本各地に現れていろんな仕事をやっている。木花開耶姫（富士山の祭神）などとも、一緒に仕事をする。家康臨終の地駿府城？
- 10 姉（豊玉）は調和の人、妹（玉依）は調和と進歩にかかわっている。ギリシャにも関係
- 11 美しさを磨くポイント 信仰心 女性としての作法 外観のコーディネート 美しさを見る鑑定眼
- 12 神武を育てた男子教育について。普通は両立しないものを両立させる日本文化の素晴らしいことがある。「神の強さ」と「美しさ」の体現、ここに天皇制の始まりもある。いかに立派な地位、名誉を得ても、この世は仮のもの「あの世に帰って本来の姿に戻る」という無常観を教えなければいけない。また、「精神的に強い人間」「困難を乗り越えてこそ、道は開ける」とこと、要するに「忍耐の心」「華美に流れず、過剰に流れず、徳ある人間になること」昭和天皇がマッカーサーに与えた「衝撃」、命乞いに来るのかと思ったが、違い、「神の姿を見た」
- 13 「天皇家は沖縄の伊平屋島から始まったという説」があるが？地理的に沖縄かどうかはっきりしないが、当時は民族が違うという意識はなかった。フィリピン、ベトナムまで交易があり、（ムー）文明の名残があった。太平洋の島々までつながっていた感じがある。
- 14 先の大戦は「ムー文明の復活なのかな」と理解していた。「日本」という意識は昔からあった。神武のときに統一されたが「日本合衆国」という意識、中国の歴史とは同じものではない「海の民としての意識」を強く持っていた。プレートテクトニクス論破の必要性
習近平であろうと、周恩来であろうと、最終的にわが前に跪かせます。「天照大神の御教えを伝える」p51
- 15 「男性の分け御靈」では、戦に勝ち、国を建てる役（家康）。「鏡王女」額田女王の姉。
- 16 大化の革新は、明治と同じ「大政奉還」。物部氏や蘇我氏の台頭で天皇家の危機、天智天皇（中大兄皇子）を中心の革命。鏡王女は天智天皇の后。鎌足の妻説は否定。
- 17 家康は「学問の力」を信じて取り入れた。「北条政子」に習って「貞觀政要」を勉強。
- 18 一神教のキリスト教は日本では危ないとと思った。「鎖国政策」は悪く言われることもあるが、「特殊な発展を遂げた」効果あり。咲也加さんが家康の孫の千姫という説があったが、「冷や汗が出る」という意味は？「今は言わない方がいい」。新入職員の靈査で家康を名乗った人、「どうして言ってしまったんでしょうね」今回は調整型ですから、大丈夫です。
- 19 西郷様や竜馬様が徳川幕府を倒してくださったので、新しい時代が始まった。限界が見えてきたので練り直す必要が出てきた。そこで力を発揮したい。慎重で謙虚な言葉はなぜ？